

鮫

さめ 真継伸彦

HYPERBAC



河出書房

鮫

真繼 伸彦



河出書房

Kawade Paperbacks 97

鮫 (さめ)

表紙絵 勝 呂 忠

表紙構成 原 弘 (NDC)

© 1964

昭和39年 4 月20日 初版印刷

昭和39年 4 月23日 初版発行

定価 280円



著 者 真 継 伸 彦

発 行 者 河 出 孝 雄

印 刷 者 守 安 巖

発 行 所 東京都千代田区 株式 河出書房新社
神田小川町3の8 会社

電 話 東 京 函 3721~7

振替口座 (東京) 10802 番

印刷・東京印刷

落丁本・乱丁本はお取り替えいたします

目次

第一篇 鮫

四頁

第二篇 夜明け

一三七頁

あとがき

二五六頁

長篇小説

鮫

(さめ)

第一篇 鮫

第一章

小さいとき、おれは鮫さめと呼ばれた。しかし、これはおれの名前ではない。死んだ兄もまた、浜の衆から鮫と呼ばれていたゆえである。母はおれをどう呼んでいたか？ 兄が生きていたあいだは「わっぱ」と呼び、兄が海で死んでからは、十になるかならぬかのおれを、いつか「おぬし」と呼ぶようになった。村にいた小さいとき、おれはほかの名で呼ばれたおぼえはない。

兄弟二人の鮫は、沖へでて鮫をとって暮らした。海が風ぐ日の夜明け、兄は鱸とちに立って櫓をこぎ、おれはその前にうずくまって餌の入った桶をかかえた。揺らぐ海が、おれにはいつまでもおそろしかった。しかし泣いたのは、はじめて舟に乘せられたときだけである。兄はそのとき片手でおれの襟首をつかみあげると、海へ放り捨てた。おれはしたたか塩水を飲み、夢中で泳いで櫓の先にしがみつくと、黙然とおれをみつめて仁王のように立ちはだかる兄の足下へよじのぼった。それから

泣かぬ。

浜の衆は魚を竿と網でとる。鮫だけではない。鰯や鰯や鰻や烏賊もとる。もっと大きい鰹や鰯もとる。揺らぐ海の遠くに十何艘もの舟がむらがるのを見、いっせいに網をひく威勢のいいかけ声を想いのうちに聞きながら、おれたちは竿で鮫だけを釣る。鮫は何でも喰う。眼がさめたばかりの夜明けには、おれたち同様飢えきっていて、昨日釣られた自分の仲間の頭のきれはしや、はらわたにも喰いついてくる。兄が腰をひねって持ちあげる太い竿をしなわせて、潮をはねとばし、のたうちまわって上ってくる二、三尺の鮫が、おれにはおそろしかった。鮫は槌で頭を割られ、包丁で腹を切り裂かれ、はらわたをひきずりだされてもまだ生きている。つぶれた頭の両脇についた小さい眼がいつまでもにらみ、歯をむきだして噛みつこうとし、尾はおれを打とうとはねまわる。細ながい胴の両わきのやわらかな五枚の鰓が、いつまでもひくひく動いている。おれは土色や蒼色の肌をした鮫が、歯をむきだして襲いかかるさまを、毎晩夢にまで見た。

獲れた鮫はみんな浜の名主様のものである。朝陽が海原の近くをみどりに、遠くを鈍色にかがやかせるとき、舟から上ったおれたちは、もっこに入れた鮫をかついで名主様の家へはこぶ。納屋の裏手で土下座して待っておれば、下衆がどこかへ持ってゆく。もっこに残してもらう二、三匹の鮫を、おれはひとりでかついで家へもどる。兄には夕方まで浜で沢山の仕事がある。五つ六つのおれは海からあがれば、家へ帰ってよかった。

浜の衆の小屋は浜べの低い丘の斜面にかたまっていた。茂る藻が透けてみえる浅い海を二町ほどへだてて、浜の真向いには樹木が覆う大きな神様の島があり、波はおだやかであった。しかし、おれ的小屋は浜から遠い。おれに石を投げつけ、「鯨」とのしる童らの眼をさけて、砂地の丘を足ばやに上って街道をよぎり、広い松林を抜け、奥の雑木林をもっこをひきずって崖の下へ降りる。斜面を覆う墓地のかたわらを過ぎれば、下の湿った窪地の右手の崖ぎわに、鋳物師いもじの小屋と、おれ的小屋と、二軒だけがならんでいた。

母が家にいたことはない。破れた菅笠をかぶり、いつも近くの佃つくだと、丘の斜面にひらいた畑の手入れをしている。せまい谷間の湿った窪地のまわりに、佃は全部で四反あった。毎年交代で、二反ずつ稲を植える。谷の下手しもての広い野で、浜の女衆がつくるのは田である。母のは佃である。春の田植えどきには女衆が多勢そろって苗を植え、男衆が田楽でんがくを踊って祝うてくても、田と佃では大きにちがう。とれる米はおなじであらうと、田のほうは七割がた名主様や作人様におさめればよい。佃でとれる米は、みんな浜の名主様のものである。おれたちは畑でとれる粟や蕎麦や、豆や芋や南瓜などを喰う。

小屋には母と、ずっと年上の兄とおれと、それから半年だけ、犬が一匹いた。どこから来たのか知らぬ。栗色のやせこけたその犬は、兄から殴られてばかりいたおれに、天が授けた玩具であった。海からもどってくるおれを、犬はいつも雑木林で待ちうけていた。浜までは迎えに来ぬ。非人の子

のおれと同様、いるべき場所を知っていた。浜までくれば、浜の衆が飼う犬に噛み殺される。おれと犬が顔をあわせれば、自分らがひもじいのをいつもたしかめ合つた。おれがたれる糞を、犬は待ちかまえて喰つた。浜から帰つてきたときは、鮫の頭や卵をくれてやる。

母が小屋に残しておいた粟飯をかきこめば、おれはさっそく働かねばならぬ。佃と畑の草をとる。重いはねつるべで何杯も水を汲む。薪をつくる。しかし雨が降つて何もせずともよいとき、おれは表の軒端にうづくまつて犬と遊ぶ。膝の上に抱きあげて、とがつた棒を耳に突きこむ。犬はながいながい悲鳴をあげる。しかし噛みついたり、逃げたりはせぬ。おれの膝にしがみつく。棒はずせば涙をためた眼でおれをみつめ、くうくうと甘えた声をあげてすり寄る。栗色のやわらかな毛や、湿った鼻づらや、熱い吐息や、分厚い足の裏の感触がこちよい。

犬は春の雪どけのころに迷いこんできたのが、秋の祭りの日に死んだ。

浜では年に二度祭りがあつた。島にお住まいの、海のむこうからこの越前へ渡つてこられた神様を祭る。神様の島は不思議な島で、広さは十町ほどの低い丘の一面に、他所ではみられぬ樹木が生えている。神様がおいでになったとき、たずさえてこられたものである。おれたちは島へのほれば殺されるが、舟でわきを通つて、二十間近くもある暗い高い岩壁を見あげるだけでも、不思議な樹木のさまはわかる。おなじ根本から生いでる数本の幹が方々にこぶをつけて、奇怪な模様にまがり

くねり、おびただしい枝葉をひろげて陽を翳らせていた。そのあいまには人肌のように陽ざしにぬめる、すらりとした細い幹もみえる。伐採が禁じられている神様の島の木には、蔓ものび放題である。島の不思議さは、暗く高い岩壁の所々にも、乳のように白い汁がにじみでて縦の縞をつくっていた。神様の島は岬の鼻にあり、浜の南側には海を抱いて高い灰色の岩壁が遠くまでつらなっているが、そのどこにも縞はない。白いののは波打際の、岩肌にこびりつく塩だけである。

神様の島にはおれたちだけでなく、ふだんは浜の衆も入ってはならぬ。名主様だけが朝晩に、お燈明をあげにお渡りになる。しかし春と秋の祭りの日には大人も子供も、浜の男衆が総出で島へ渡る。赤や紫や青や黄や、色とりどりの吹きながしをなびかせた十数艘の舟に、まあたらしい白の水干を着た男衆が鈴なりに乗り、いっせいに漕いでゆく。顔には鮫や鰯や鯛や鰯や、蛸や烏賊や鮑や蛤など、海でとれるあらゆる魚介の面をつけている。櫓を漕がぬ者は法螺貝や笛を吹き鳴らし、鉦や鼓やびんざさらを叩きながら、腰をゆすって豊漁の歌をうたう。おどけて海へはまる男もいる。島の磯べにつけば、低い丘のふもとに小さくみえる朱塗りの鳥居をくぐり、鬱蒼と繁る樹木が隠す奥の坂道をあらそって馳せのぼる。

やがて森の奥でどよもす歓声がまたかすかに聞こえはじめれば、神輿をかついだ行列が鳥居の下に姿をあらわして、一番大きい舟にかつぎこむと、いっせいに漕ぎもどってくる。神輿は着かざった女衆や、近くの在所からきた見物衆が見まもる浜べを練りあるく。

浜には市もたつ。一里南の三国湊から、多勢の行商人がやってきて店をはる。琵琶法師や傀儡師もくる。乞食もきて、見物衆がむらがる店のまわりをうろついている。

祭りににぎわう浜の様子を、おれはいつも少しはなれた丘の松林のかげから見ている。浜の男衆がさまざまな楽器を鳴らしながら、「豊漁じゃ、ああ豊漁じゃ」と胴間声で無限にくりかえす単調な節を、言葉までは聞こえず、ただひとかたまりのどよめきのように聞いていた。着かざった女衆の色とりどりの姿がみだれ動くさまに、うっとり見とれた。浜の片隅には、何も飾ってもらえぬおれたちの小舟だけが、乾いた腹をみせて芥のようである。おれもまた、いつもの汚い袖なしを着ているが、それでも祭りは待ち遠しい日であった。母がつくってくれる鯖の身をまぜた蓮飯を、その日だけは腹いっぱい喰える。男衆が海へはまったときはおれも笑う。帰れば母に話そうと思う。母は祭りの日も畑で働いていた。何か買物があるときは、夕に店をしまつて帰る商人衆に、道ばたでそつと頼む。

その年の秋の祭りには、三国湊の代官様が、家来をつれて見物においでになった。浜の衆が中食に家へもどり、やや閑散となった昼の浜べの一隅に、大きな四角い囲いがつくられた。名主様の下衆にまざって、いっしょに竹垣を組んでいる兄の姿もみえる。代官様にお見せするため、何かめずらしい見世物がはじまるのであろう。

やがて高い烏帽子をつけた代官様が、名主様の屋敷からおでましになる。こちらからは見えぬが、

浜の高みに張りめぐらした紅白の幔幕のかげの床几にお坐りになると、その下方の竹垣のまわりに
むらがっていた見物衆が追いはらわれた。やわらかな陽が照らすばかりの、浜べの一瞬の静寂をや
ぶり、おびただしい犬の鳴き声が聞こえてきた。どこにつながれていたのか、下衆の手にひきずり
だされた五十匹ほどの犬が、つぎつぎに竹垣のなかへ投げこまれた。おびえた犬どもは、囲いのな
かを駆けまわる。そのとき、おれは不吉なものを予感した。おれの犬が――やせた栗色のあいつも
また、いつのまにか捕えられていたのではないのか？ おもわず身をのりだした。すると、いた。
黒や白やおなじ栗色の犬にまざり、尾っぽを股間にはさみ、あいつもいっしょに吠えながら、逃げ
場はないかと駆けめぐり、外へ出ようと跳ねまわっていた。

たちまち十騎ほどの騎馬武者があらわれる。兜の金銀の鍔形を陽にきらめかせて、囲いのまわり
を左へ旋回しながら、矢をつがえてつぎつぎに犬を射た。矢があたった犬は、空中に何尺も飛びあ
がる。どすぐろい血がさらに高く噴きでる。おびただしい断末魔の悲鳴が、さらに遠くまでとどい
て耳につきささる。おれは松の木にしがみつき、顔だけをのぞかせて見ていた。鮫におそわれる夢
を見るときに似て、冷汗がでた。「逃げれ、逃げれ」と、心のなかで叫んだ。

いつか、おれは囲いのなかのあいっぴになつてゐる。尾っぽを股間に巻きこみ、必死に逃げまわる。
しかし矢はおれの横腹をつらぬき、とんぼ返りをうって地べたへ叩きつけられる。遠くに立ちつく
す小さな主人を、おれは涙にかすむ眼でみあげる。おれがむごい最期をとげるのに、主人は何もせ

ぬ……。血の池のなかに五十四の犬がすべて横倒しになったとき、おれはようやくわれにかえった。朝に咽喉もとまでつめこんだ蓮飯を、おれは四つばいになり、枯れた笹原の上にもだえながら吐いていた。吐いた蓮飯を惜しみながらも、自分があいつでなかったことを知り、おれはほっとした。

村にいた小さい時の思い出には、いつもやわらかな陽がさしている。詳細におもい起こせば、火の気のない小屋でこごえていたり、始終飢えていたり、浜の子供衆に痛めつけられたり、辛い思い出は数かぎりないのに、それはいかなる次第であろう。ともかくおれは生きられた。村を出てからはるかに辛い思い出が、村の思い出をきつと甘やかしているのであらう。しかしまた三国の湊町へゆき、九頭竜くずりゅうの河岸や浜べに小屋掛けする多勢の乞食を見たとき、自分がまじな暮しをしているのを知って、おれは子供ごころに喜んだ。おれは物乞いして船頭衆の竿で殴られたり、武家衆が馬上からふるう鞭で打たれずとも済んだ。せむしでも血の気のうせた劳咳ろうがいやみでもなく、癩病やみのように五体のどこかが頽くずれているわけでもない。三国湊にはさような乞食が多勢いた。遠国から大きい船で海を渡ってくる船頭衆や旅人の袖をしつつこくひいて、かろうじて生きている。乞食のなかには、おれとおなじ年恰好の、盲や、いざりや、せむしもいた。しかし、おれは働いておりさえすれば、二度の飯にはありつける。夜は一間の掘立小屋であらうと、吠かえすにもぐりこんで、蚤と虱といっしょにあたたかく寝た。

しかしまた……思い出す、村にいた小さい時の思い出にやわらかな陽をあてているのは、となりの小屋に住んでいた、あの鋳物師の老人である。小柄なやせた老人で、しなびた丸顔のまわりに白いひげを生やしていた。左足が跛で、たしか右眼がつぶれていた。山で木を伐っていた最中に、毛虫が眼のなかへ落ちてきたという。あわててこすった拍子に、もげた毛が突きささり、眼がつぶれた。生国しやうこくはいずこか、聞いてもとうに忘れてしまったが、男ざかりの年には十数年、鋳物師の行商仲間に入っていたという。老いて歩き疲れた足が跛になったとき、この越前に捨てられた。

鋳物師は何でもつくった。溶かした鉄を鋳型にはめて、釜や鍋をつくった。鍛冶屋もかねて、槌ひとつで鋳や鎌をつくりだした。戦の噂がひろまるときは、安物の刀や矢じりもつくる。朝と夕、鋳物師の家へ火種をもらいにゆくのがおれの役目であった。冬の夜明け、鋳物師がまだ眠っている、おれが戸口に大きくぶらさがるつららを割ってなかへ入れば、こころよく起きてくれる。燵ひうちを一、二度鳴らすだけで、火口くちはもうくすぶりだした。

冬には海へ出られぬ。雪が埋めつくす畑も掘れぬ。母は小さな明かり窓の前で麻布を織り、兄は名主様の家で下働きをした。山奥へ塩をはこぶ人足となって、ながいこと帰ってこぬ日々もあった。おれは一日中鋳物師の小屋にいた。水を汲んだり、ふいごを吹いたり、矢じりを鑪やすりでみがいたり、ろくな仕事はできぬが、鋳物師の小屋はあたたかい。外には吹雪がすさぶとも、炉には炭火が熾おこっている。礼にもらった餅を喰わしてくれることもある。茶という甘いものを飲ませてくれる。その

うえ、仕事のあいまにめずらしい話を沢山聞かせてくれた。

「鮫よ」

と、老人は仕事の手をやめると、いがらっばい大声で話しかけてくる。

「おまえは浜の子じゃ。山のことは何にも知るまいが。狐を見たことはあるか？」

「ある」

おれは威張って答える。いつか三国湊の市で見た、店にぶらさがる狐をおもいうかべる。

「生きておるやつを見たことはあるまいが。狐は口から火を吐くぞ。わしは見たぞ。狐は嘘をつく人間の生まれかわりじゃ。それで狐となった今生こんじょうでも人をたぶらかす。そのかわり、口から火を吐いて苦しんでおるのじゃ。おまえは道で茶釜をみつけても、拾うて持ち帰ってはならんぞ。それのう、狐が化けておるのじゃ。よろこんで持ち帰ろうとすれば、歩いておるうちに、だんだん重うなってくる。そのうち釜のなかからうす気味わるい声がして、『わしをどこへ連れてゆく？』と言いおるのじゃ。肝をつぶして茶釜を放りだせば、もとの狐にもどつて、エヘラエヘラと笑いおるのじゃ。……わしらは雪山へよう狐をとりに行つたもんじゃ。狐とりには、杵きねさえあればよい。陽がさして雪がやわらかいうちに、杵をさしこんで穴を三つ四つ作つておくのじゃ。夜となれば雪は凍つて、穴はコチコチに固うなる。わしらはまわりに狐が好物の油かすを撒く。穴のなかへも入れておくのじゃ。わしらが里へもどつたあとで、狐が匂いを嗅ぎつけて出てくる。はじめはうさんくさ

そんな顔をして見ておるが、好物にはたまらんわい。油かすを喰いまわり、穴のなかのも喰おうともぐってゆく。穴は尾の先がわずかに出るほどにこさえてある。腹はふとい、雪はすべる。いったん入ればもう出られんのじゃ。朝がたに、わしらは水を入れた桶をかついで山へのぼる。穴の上に尾っぽがみえれば、なかへ水を注ぎこむのじゃ。尾がビクビクふるえて、狐の最期じゃ。わしらは遠くはなれて見物しておる。狐が最後にひる尻は、たまらんほど臭いからじゃ。尾が動かなくなれば、わしらはそばへもどって、大根を抜くがようにすっぽり抜きとるのじゃ」

白い灰の皮をかぶる炉の炭火をあいだにはさみ、おれは手ぶりをまじえて語る鑄物師の顔を、穴があくほどみつめている。鑄物師の皺ばんだ顔がふと、とがった狐の顔にかわる。口から火を吐き、エヘラエヘラと笑い、雪の上に撒いた油かすをむさぼり喰う。家へ帰って夢にもう一度みる狐は、いづれも右眼がつぶれていて、笑い声はいがらっぽい。

鑄物師の話にはわからぬ言葉が多い。おれは都の話をやがんで聞くが、どうしても腑に落ちぬ言葉が沢山でてくる。鑄物師は公方様とか管領様とかいう言葉をつかう。浜の名主様や三国湊の代官様より、ずっと偉いお方であるそう。都は三国よりまだ大きい町で、内裏とか花の御所とか、広い屋敷がいくつもあるという。その広さとは言えば、神様の島が中へそっくりおさまるぐらいであるそう。内裏のほうには帝様と申して、公方様とおなじくらい偉いお方が住んでおられる。周囲には高い築地がめぐらされて中はみえぬが、綺麗な出車というものを牛がひいて、出たり入ったり